黄最津平阪に八つの『雷を却けるため、桃の実を礫に打ったままっからまかでいた。何でも天地開、闢の頃おい、伊弉諾の尊はれの枝は雲の上にひろがり、この桃の根は大地の底の黄泉の国に という、 一本あった。大きいとだけではいい足りないかも知れない。この むかし、むかし、大むかし、ある深い山の奥に大きい桃の木が ――その神代の桃の実はこの木の枝になっていたのであ

うである。実は――実もまた大きいのはいうを待たない。が、そ 度実をつけていた。花は真紅の衣蓋に黄金の流蘇を垂らしたよこの木は世界の夜明以来、一万年に一度花を開き、一万年に一 人ずつ、おのずから孕んでいたことである。 れよりも不思議なのはその実は核のあるところに美しい赤児を一

水煙をなびかせながら、人間のいる国へ流れていたのである。 ともう赤みのさした、小さい実を一つ、啄み落した。実は雲霧のともう赤みのさした、小さい実を一つ、啄み落した。実は雲霧の に拾われたか?――それはいまさら話すまでもあるまい。谷川の 命は一羽の八咫鴉になり、さっとその枝へおろして来た。と思う 立ち昇る中に遥か下の谷川へ落ちた。谷川は勿論峯々の間に白い 結んだ実は一千年の間は地へ落ちない。しかしある寂しい朝、運 と実を綴ったまま、静かに日の光りに浴していた。一万年に一度 むかし、むかし、大むかし、この木は山谷を掩った枝に、累々むかし、むかし、大むかし、この木は山谷を掩った枝に、この木 この赤児を孕んだ実は深い山の奥を離れた後、どういう人の手

> 末にはお婆さんが一人、日本中の子供の知っている通り、柴刈 りに行ったおさんの着物か何かを洗っていたのである。……

か、出陣の支度に入用のものは云うなり次第に持たせることにったから、一刻も早く追い出したさに旗とか太刀とか陣羽織と を聞いた老人夫婦は内心この腕白ものに愛想をつかしていた時だ 黍団子さえこしらえてやったのである。 た訣はなぜかというと、彼はお爺さんやお婆さんのように、山だ桃から生れた桃太郎は鬼が島の征伐を思い立った。思い立っ した。のみならず途中の兵 糧には、これも桃太郎の註 文通り、 の川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだったせいである。その話

野良犬が一匹、饑えた眼を光らせながら、こう桃太郎へ声をかけのいかがぬ。 桃太郎は意気揚々と鬼が島征伐の途に上った。すると大きい

「これは日本一の黍団子だ。」 桃太郎さん。桃太郎さん。お腰に下げたのは何でございます?」

聞くと、たちまち彼の側へ歩み寄った。 そんなことは彼にも怪しかったのである。けれども犬は黍団子と 桃太郎は得意そうに返事をした。勿論実際は日本一かどうか、

「一つ下さい。お伴しましょう。」 桃太郎は咄嗟に算盤を取った。

犬はしばらく強情に、「一つ下さい」を繰り返した。しかし桃「一つはやられぬ。半分やろう。」

う代りに、桃太郎の伴をすることになった。するばかりである。犬もとうとう嘆息しながら、黍団子を半分貰らゆる商売のように、所詮持たぬものは持ったものの意志に服従太郎は何といっても「半分やろう」を撤回しない。こうなればあ

こういういがみ合いを続けていたから、桃太郎は彼等を家来にしする。地震学などにも通じた雉は頭の鈍い犬を莫迦にする。――間がらではない。丈夫な牙を持った犬は意気地のない猿を莫迦にがらではない。丈夫な牙を持った犬は意気地のない猿を莫迦や雉を家来にした。しかし彼等は残念ながら、あまり仲の好い桃太郎はその後犬のほかにも、やはり黍団子の半分を餌食に、猿

た後も、一通り骨の折れることではなかった。

「宝物? へええ、鬼が島には宝物があるのですか?」欲の深い猿は黙い眼をした。

はいずれも多少気違いじみた女性崇拝家ではなかったであろう

という宝物さえある。」「あるどころではない。何でも好きなものの振り出せる打出の小槌「あるどころではない。何でも好きなものの振り出せる打出の小槌

桃太郎はもう一度彼等を伴に、鬼が島征伐の途を急いだ。かわたしもつれて行って下さい。」一度に何でも手にはいる訣ですね。それは耳よりな話です。どう「ではその打出の小槌から、幾つもまた打出の小槌を振り出せば、

りも享ゃ的に出来上った種族らしい。瘤取りの話に出て来る鬼は勿論平和を愛していた。いや、鬼というものは元来我々人間よする、美しい天然の楽土だった。こういう楽土に生を享けた鬼ばかりだった訣ではない。実は椰子のえたり、極楽鳥のったりはかりだった訣でない。実は椰子のえたり、極楽鳥のったりまが島は絶海の孤島だった。が、世間の思っているように岩山鬼が島は絶海の孤島だった。が、世間の思っているように岩山

は一晩中踊りを踊っている。一寸法師の話に出てくる鬼も一身のは、一晩中踊りを踊っている。一寸法師の話に出てくる鬼も一身のは、一晩中踊りを踊っている。一寸法師の話に出てくる鬼も一身のいたのは確かである。その女人を奪って行ったというのは一一真偽がしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。なるほどから、なるである。その女人を奪って行ったというのは一一真偽がはしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。なるほどから、本書ではないである。その女人を奪って行ったというのは一一真偽がはしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。真偽はしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。真偽はしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。真偽はしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。真偽はしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。真偽はしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。真偽はしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。真偽はしばらく問わないにもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。真偽はしばらいた。いや、鬼というものは元来我々人間よりも享いである。

つけるし、泥棒はするし、手のつけようのない毛だものなのだよいし、焼餅は焼くし、己惚は強いし、仲間同志殺し合うし、火は手足へ一面に鉛の粉をなすっているのだよ。それだけならばまものだよ。おまけにまた人間の女と来た日には、その生白い顔やまうのだからね。え、人間というものかい? 人間というものは角まうのだからね。え、人間というものかい? 人間というものは角の生えない、生白い顔や手足をした、何ともいわれず気味の悪いの生えない、生白い顔や手足をした、何ともいわれず気味の悪いの生えない、生はあの昔の酒顛童子のように、きっと殺されてしるのがある。

四

えた椰子の間を右往左往に逃げ惑った。鬼は金棒を忘れたなり、「人間が来たぞ」と叫びながら、亭々と聳塊な蛇にないはこういう罪のない鬼に建国以来の恐ろしさを与えた。

「進め! 進め! 鬼という鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺し

てしまえ!」

マ人間と親類同志の間がらだけに、鬼の娘を絞殺す前に、必ずみがまれる鬼を追いまわした。犬はただ一噛みに鬼の若者を噛み必じまわる鬼を追いまわした。犬はただ一噛みに鬼の若者を噛み格を具えているものはないはずである。彼等は皆あらしのように、格を具えているものはないはずである。彼等は皆あらしのように、が、鎌えた動物ほど、忠勇無双の兵卒の資犬猿雉の三匹に号令した。犬猿雉の三匹は仲の好い家来ではな犬猿雉の三匹に帰令した。犬猿雉の三匹は仲の好い家来ではな犬猿雉の三匹は桃の旗を片手に、日の丸の扇を打ち振り打ち振り、桃太郎は桃の旗を片手に、日の丸の扇を打ち振り打ち振り、

凌 辱を 恣 にした。……

ではない。椰子の林は至るところに鬼の死骸を撒き散らしていてはない。椰子の林は至るところに鬼の死骸を撒き散らしていではない。椰子の林は至るところに鬼の死骸を撒き散らしている。桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の家来を従えたまま、平蜘蛛る。桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の家来を従えたまま、平蜘蛛のようになった鬼の酋長へ厳かにこういい渡した。のようになった鬼の酋長へ厳かにこういい渡した。柳太郎の得意は思うとめた数人の鬼と、桃太郎の前に降参した。桃太郎の得意は思うりに鬼が島の宝物は一つも残らず献上するのだぞ。」といれている。秋太郎の得意は思うとめた数人の鬼と、桃太郎の前に降参した。桃太郎の得意は思うとめた数人の鬼と、桃太郎の前に降参した。桃太郎の得意は思うりに鬼が島の宝物は一つも残らず献上するのだぞ。」

「はい、献上致します。」

「なおそのほかに貴様の子供を人質のためにさし出すのだぞ。」

「それも承知致しました。」

鬼の酋長はもう一度類を土へすりつけた後、恐る恐る桃太郎

へ質問した。

が参りませぬ。ついてはその無礼の次第をお明し下さる訣には参が島の鬼はあなた様にどういう無礼を致したのやら、とんと合点を受けたことと存じて居ります。しかし実はわたくしを始め、鬼「わたくしどもはあなた様に何か無礼でも致したため、御征伐

-

りますまいか?

「日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹の忠義者を召し抱えた故、鬼が桃太郎は悠然と 頷 いた。

島へ征伐に来たのだ。」

ますか?」 「ではそのおかたをお召し抱えなすったのはどういう訣でござい

ても召し抱えたのだ。――どうだ? これでもまだわからないと 「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍団子をやっ

いえば、貴様たちも皆殺してしまうぞ。」

よまた丁寧におをした。 鬼の酋長は驚いたように、三尺ほど後へ飛び下ると、いよい

五

物の車を引かせながら、得々と故郷へ凱旋した。――これだけは日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹と、人質に取った鬼の子供に宝 もう日本中の子供のとうに知っている話である。しかし桃太郎は ると番人の雉を噛み殺した上、たちまち鬼が島へ逐電した。のみ 必ずしも幸福に一生を送った訣ではない。鬼の子供は一人前にな ういう重ね重ねの不幸に嘆息を洩らさずにはいられなかった。 殺されたのは人違いだったらしいという。噂である。桃太郎はこ 屋形へ火をつけたり、桃太郎の寝首をかこうとした。何でも猿のやかた ならず鬼が島に生き残った鬼は時々海を渡って来ては、桃太郎の 一やっと命を助けて頂いた御主人の大恩さえ忘れるとは怪しから 「どうも鬼というものの執『念の深いのには困ったものだ。」

ぬ奴等でございます。_

である。 犬も桃太郎の渋 面を見ると、口惜しそうにいつも唸ったもの

弾を仕こんでいた。優しい鬼の娘たちに恋をすることさえ忘れた がら。..... 鬼の若者が五六人、鬼が島の独立を計画するため、椰子の実に爆 のか、黙々と、しかし嬉しそうに茶碗ほどの目の玉をがかせな その間も寂しい鬼が島の磯には、美しい熱帯の月明りを浴びた

八咫鴉は今度はいつこの木の、梢へもう一度姿を露わすであろやたがらす ように、累々と無数の実をつけている。勿論桃太郎を孕んでいたしている。 眠っている。 う? ああ、未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず まだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている。あの大きい 実だけはとうに谷川を流れ去ってしまった。しかし未来の天才は 人間の知らない山の奥に雲霧を破った桃の木は今日もなお昔の

(大正十三年六月)